

## 不可視化されるセクシュアリティと「差別」

——今江祥智『どろんこ祭り』をめぐるジェンダー／セクシュアリティ言説の検討——

横浜国立大学

石田喜美

キーワード：『どろんこ祭り』，言説，「差別」，ジェンダー，セクシュアリティ

### 1. 問題の所在

国語教育研究では「隠れたカリキュラム」の視点から、国語教科書教材における不公平なジェンダーの扱われ方を批判的に検証した研究が行われてきた(牛山 2014)。永田(2012)はさらに「クィア(queer)」の視点を導入し教科書教材の分析を行うことで、そこにある性別二元論規範、性別役割規範、および異性愛規範の存在を指摘している。一方、過去にすでに提示されたことがあるにも拘らず、当時の議論の枠組みでは十分にその意味が理解されなかった論点も存在する。そのひとつが「セクシュアリティ」<sup>1</sup>である。本発表ではジェンダー視点からの教科書教材研究のメルクマールとなった「『教科書』における男女平等についての意見書」(日本弁護士連合会, 1989=2008)において「特に問題のあるもの」(同上, p15)として取り上げられている今江祥智『どろんこ祭り』をめぐる議論を検討し直すことで、セクシュアリティの視点から、教科書教材における「差別」を議論することの意義を示したい。

### 2. 国語教科書における性差別と「どろんこ祭り」

今江祥智『どろんこ祭り』は、光村図書によって昭和 52(1977)年度から平成元(1989)年度まで発行された小学校用国語科教科書に掲載された教材である。いずれも小学 6 年生用教材として掲載されている。昭和 53(1978)年に発行された学習指導書『小学新国語 学習指導書 6』の「単元の趣旨」には「この作品によって物語の筋の展開のおもしろさを読み味わわせるとともに、少年と少女の素朴な心の触れ合いの中に、さわやかな、ほのかな愛の世界を感じとらせ、豊かな情緒を高めていくようにしたい」と記載されている(p66)。今江(2002)も本作について「国語教科書に初めてラヴ・ストーリーが入った—とも言われたし、それにしても“男らしく女らしく”とは何事か—とも詰られたりもした一篇でした」(今江 2002, p87)と述懐するように、当時、本作は「少年」と「少女」のロマンティックな関係性を描いた教材として評価されていた。

「どろんこ祭り」は「高知に伝わる一種の“奇祭”

(今江 2002, p87)であり、本作はその“奇祭”が行われる土佐地方を舞台とする。「おきやんで、まるで男の子みたい」と言われる「せっちゃん」と、東京から土佐に転勤してきたばかりでせっちゃんに「いかんぜ、男のくせに。しっかりしいや」と叱られる「三郎」、この二人の関係が主軸となって物語が展開する。ある日、せっちゃんは、池のコイをつかまえることを条件に「なんでも言うこと聞いてくれる」ことを三郎に依頼する。結局、せっちゃんはコイをつかまえることはできないのだが、その代わりにフナをつかまえる。三郎はそれに対して「いいよ。ただし、約束は一つだけ」とせっちゃんに告げ、せっちゃんは「どろんこ祭り」の日に「着物のかえっこ」をしてほしいと依頼する。「どろんこ祭り」は田植え姿の女が逃げる男にどろを塗る“奇祭”である。「着物のかえっこ」をし女装姿で祭りに参加した三郎は、周囲に促されるまま、男装したせっちゃんにどろを投げると、せっちゃんが逃げる。このような中でこれまでの二人の関係が逆転していく。物語の終盤部には「せっちゃんのほうは、自分のいたずらからこんなことになって、これまたいつものせっちゃんらしくなく、おろおろしていた。そこで初めて、二人とも、本来の男の子、女の子に立ち戻ったみたいだった」との記述がある。

本作への批判は本書が教科書に掲載されてから比較的早い時期から存在する。毎日新聞は、1980年4月末に行われた「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」によるシンポジウムで本作に対して批判が行われていたことをほのめかす記事を掲載している(毎日新聞 1980, p15)。また前述したとおり、1989年には、日本弁護士連合会(以下、日弁連)が本作を批判している。

### 3. 「どろんこ祭り」におけるセクシュアリティ

「さわやかな、ほのかな愛の世界を感じさせたいとする学習指導書の記述(2.参照)に示されるとおり、セクシュアリティは本作のテーマのひとつであるともいえる。問題となるのはそれが「暴力的に女性を辱める行為」(伊藤ほか 1991, p39)を契機とし

た性認識のめざめとして記述される点だ。ここで「女性を辱める行為」とされる場面のせっちゃんの仕草については、関(1992)も「だが、このマツリの場面における、せっちゃんの仕草には過剰に性的なるもの(セクシュアリティ)が付与されているといわざるを得ない」(関 1992, p62)と指摘する。本作における「男らしさ」「女らしさ」は、「過剰に性的なるもの」とも評されるようなセクシュアリティと結び付けられている。下記に示す「会社員 27歳」による投書は、セクシュアリティと関連づけた本作の読まれ方のひとつを示す。

…この種の作品は、今も日本人の心情の好むところだろう。「男の背中」というように、男はいつの世でも、社会性としての男らしさを期待される。一方の女らしさは、何かにつけ男性にとっての「色気」の問題として語られがちだ。しかし実際には、社会的な意味での女らしさの定義は難しい。

ただ、性のテーマは最終的には性的アピールの問題にかかわる以上、男らしさ、女らしさという価値観が存在することは否定できないと思う。それは男女差別ではなく、おのおの固有の性のすばらしさを認めることではなかろうか。…。(鈴木 1992)

ここで問題となるのは、セクシュアリティを媒介にして、本来「差別」として議論すべき点があたかも「差異」、すなわち「男らしさ、女らしさ」の問題であるかのように論じられていることである。江原(1985=2002)は、「『差別』とは本質的に『排除』行為である。『差別』意識とは単なる『偏見』なのではなく、『排除』行為に結び付いた『偏見』なのである」(江原 1985=2002, p139)と述べる。この投書では、男性＝「社会性」があるものとしたうえで、それが無いものとして女性を規定し(「社会的な意味での女らしさの定義は難しい」)排除の対象としている。これは「『排除』行為に結び付いた『偏見』、すなわち「差別」であるが、投書の後半ではそれが「差異」、すなわち「男らしさ」「女らしさ」の議論と結びつけられることで「それは男女差別ではなく、おのおの固有の性のすばらしさを認めること」という主張が可能になっている。

ここで重要なことは、そのような「差別(=排除)」の議論から「差異」の議論への転換において、セクシュアリティ(「色気」「性的アピール」)が持ち込ま

れている点である。投稿者は「この種の作品は、今も日本人の心情の好むところだろう」とした上で、本書が「性のテーマ」に関わるものであること、それが「最終的には性的アピールの問題にかかわる」と述べる。さらに、「女らしさ」には「社会的な意味」を持つものは含まれず、男性に「性的アピール」を感じさせるもの(「色気」)こそが「女らしさ」であるのだから、そのようなものとして男女の「差異」を認め合うべきだと主張する。セクシュアリティを「女らしさ」と結び付けることが、「差別」から「差異」へと置き換えを可能にしているのだ。

本作の問題を、固定的な「性別役割分担意識」(日弁連 1989, pp.25-27)のみに限定することは、このような「差別」「差異」を混同させる議論を許容してしまう。ここで問題視すべき「差別」、すなわち「『排除』行為に結び付いた『偏見』」(同上)は、固定的な「性別役割分担意識」を反映した表現のみではない。むしろ、せっちゃんの「女らしさ」を「おろおろして」いる様子へと結び付けるような語りの構造、およびその語りの構造によって構築されるセクシュアリティのあり方を問題視する必要がある。

しかし、本作におけるセクシュアリティの描かれた方の問題性については、十分に焦点が当てられることがなかった。そのため、「差別」的なセクシュアリティの描き方はそれほど問題視されぬまま、二分法的なジェンダーを前提としたまま問題への対応が進められていった。例えば、本作を掲載した光村図書は、一連の批判を踏まえ、本作に取り換えるかたちで、平成 4(1992)年度版教科書に、名木田恵子による書下ろし作品『赤い実はじけた』を掲載した。作者・主人公ともに男性である『どろんこ祭り』に対し、作者・主人公ともに女性である『赤い実はじけた』を掲載したのだ。つまりジェンダー二分法を基盤とした、男性から女性への置き換えである。一方セクシュアリティに関していえば「過剰に性的なるもの」はなくなったものの、その「差別」的な構造は残されている。これについて関(1992)は、本作において主人公の思慕を発動するものが「職業的差異」であり「仕事をする男の子を女の子がみとれて見守るという、古風な性別分業のドラマに変換される可能性」(関 1992, pp.65-66)を有すると指摘する。

#### 4. 不可視化されるセクシュアリティ

##### 4.1. 日弁連意見書提出過程に生じた不可視化

なぜ、このようなセクシュアリティと「差別」と

の結びつきは看過されてきたのだろうか。以下、(1)日弁連における意見書、(2)学習指導書の言説を検討することで不可視化がいかに生じたかを検討する。

伊藤ほか(1991)は、日弁連(1989)の調査にかかわった日弁連女性の権利委員会のメンバーのうち4名が「意見書の後に出た国語、社会、家庭の教科書と道徳の副読本(小学校は平成元年度版、中学校は一部二年度版)も点検、意見書で取り上げた旧版と比べ」出版したものである(中日新聞 1991, p20)。中日新聞によれば、同意見書は「ハチの巣をつついたような質問と異議」により一度差し戻しとなり、「男女平等の流れの中で教科書を見直し“説得力のある意見書”に衣替え」がなされたという(同上)。日弁連(1989)と伊藤ほか(1991)の違いは、このような意見書提出のプロセスの中で削除されたものの存在を浮かび上がらせる。

まず日弁連(1989)で『どろんこ祭り』について言及されている部分を確認する。これは「八、国語科」(4)「男らしさ・女らしさ」の一部であり、ここで本作の問題は「『男らしさ・女らしさ』を生来的なものとして肯定する」点であるとされる。一方、「らしさ」の内実として、「荒っぽい男の子」と「おろおろして許しを請う女の子」という構図が見られること(下線部)は指摘されているものの、セクシュアリティに関する描写との関連は示されていない。

他方、特に問題のあるものとしては、光村図書六年「どろんこ祭り」がある。ここでは、前半で元気な女の子、ひ弱な男の子として描かれていた二人がどろんこ祭りをきっかけに、おろおろして許しを請う女の子と荒っぽい男の子になり、それを肯定的に評価し、「二人とも、本来の男の子、女の子に立ち戻ったみたいだった。」として、『男らしさ』『女らしさ』を生来的なものとして肯定する。(日弁連 1989, p15)伊藤(1991)では、「生来的なもの」と記述した内容の問題が明確に記述されるとともに、カッコ書きで「さらにもう一点つけ加えれば」として「暴力的に女性を辱める行為」を性認識の契機として描出することの問題性が指摘されている(下線部)。

しかしこの「どろんこ祭り」はただ「男らしい」男性と「女らしい」女性を登場させているのではない。それこそが本来のあるべき姿と明確に主張しているのだ。…(中略)…。ここには例外の存在を許さない厳しさが感じられる。(さら

にもう一点つけ加えれば、その性認識が暴力的に女性を辱める行為を契機になされるといことは児童の健全な異性観の育成の点でも問題がある)。(伊藤ほか 1991, p39)

カッコ書きによる表記が示唆するように、この部分の議論は、日弁連(1989)には記載されていない部分である。これは当初議論としては登場しながらも日弁連の意見書作成・提出のプロセスで削除された論であると見なすことができよう。

#### 4.2. 指導書内の言説における不可視化

では「暴力的に女性を辱める行為」と評されるようなどろんこ祭りの描写について、学習指導書ではいかなる説明がなされているのか。平成元(1989)年に発行された学習指導書『国語 6上 学習指導書』の「教材の研究」の中には「叙述の分析」として、どろんこ祭りでのせっちゃんの仕草に関わる二つの描写について説明がなされている(表1)。

表1 叙述の分析(『国語 6上 学習指導書』p163より)

テキスト	解説
着物の前をおさえて… しゃがみこんでしまった	女の子らしさを見せるせっちゃんのしぐさ。立場の逆転の始まりである。
「もう、ゆるいて。」	本来の女の子らしい女の子に変わっていくせっちゃん。…力をこめてせっちゃんの手を引っ張る三郎、おろおろしているせっちゃんという表現につなげて読む。

表1にあるように、「どろんこ祭り」におけるせっちゃんの仕草はすべて「本来の」「女の子らしさ」を示すものと解説されている。セクシュアリティを媒介項として「差別」を「差異」として語る論理が、ここにも見られる。同年に発行された『国語科 指導事例集 6年』には「指導の実際」として「しゃがみこんでしまった時のせっちゃんの気持ちは、どうだったでしょう」という問いに対して「さぶちゃん、もうやめよう」「さぶちゃん、もうやめて、お願いだから、もうやめて」と回答する児童の姿が記録されている。児童の中にはこの場面における暴力性を認識する者が存在するもののそれが指導書の提示する教材解釈の中で看過されていた可能性がある。

では暴力性を不可視化する教材解釈とはいかなるものだったのであろうか。『国語 6上 学習指導書』の「教材の解説」にある「主題」の解説では、「では、『二人の変化が引き起こされた訳』は何か」という問いに対して次のような論が示されている。

…こうたどってみると、変化を引き起こしたのは、現象的には、どろんこ祭りであったにしても、その裏には、せっちゃんの考えがはたらいっていたのである。祭りのときに、泥を投げ付ける側の人に、三郎をしてやろう——そういうせっちゃんの思いやり、あるいは、いたずらっ気がそれであろう。

(『国語 6 上 学習指導書』, p162)

この解説ではこの論を踏まえ、そこに三郎とせっちゃんの「心の通い合う姿が、くつきりとにじみ出てくることになる」(同上)とも述べる。つまり一見暴力的にすら見えるどろんこ祭りでの出来事の背後には、せっちゃんの「泥を投げ付ける側の人に、三郎をしてやろう」という「思いやり」があるのだから、それは暴力ではなく、せっちゃんの意図が通じた結果、すなわち「心の通い合う姿」なのだという議論である。そのため、せっちゃんのうろたえる姿に「暴力的に女性を辱める行為」を読みとることは、「思いやり」や「心の通じ合い」が読み取れていないことの証左としてのみ解釈されてしまう。

## 5. おわりに

以上見てきたように、日弁連の報告では「“説得力のある意見書”に衣替え”する過程で、指導書では「教材の解説」において暴力的なセクシュアリティに関わる場面を、暴力をうける側による「思いやり」とする解釈を提示することによって、セクシュアリティと「差別」との結びつきに関する問題が削除されたり、それが不可視化されたりしていた。

関(1992)は、「ジェンダー分析、ジェンダー批判という一枚岩的な方法で事足りていたフェミニズム批評」が新たな局面を迎えざるを得ないこと、その際に問われるのは、いかに「セクシュアリティという相互的で対等な性的視点をとりうるか否か」であると指摘する(関 1992, p71)。今、我々に求められているのはあらゆる二分法的な枠組みを超えて、排除的・非対称的な関係性そのものを批判的に見ていくことだろう。セクシュアリティという視点による批判は、「差別」と「差異」とを混同せずに、そのような批判を行うための有効な枠組みとなる。

## 注

1) 『女性学事典』(岩波書店, 2002)では「セクシュアリティ」を「性にかかわる欲望と観念の集合。…人間の性行動にかかわる心理と欲望、観念と意識、性的指向と対象選択、慣習と規範などの集合を

指す」(上野 2002, p293)と説明している。

## 文献

- 新しい教科書 「どろんこ祭り」を学問する(きょういく探検隊), 朝日新聞, 1992-04-06, 朝刊, 教育, p11. 聞蔵Ⅱビジュアル, (参照 2022-03-18).
- 伊藤良徳・大脇雅子・紙子達子・吉岡睦子. 教科書の中の男女差別, 明石書店, 1991.
- 今江祥智. “解説 文学の愉しみ, 面白さや重み.”. ガラスの小びんほか. 樺島忠夫, 宮地豊, 渡辺実監修. 光村図書出版, 2002, pp.83-89, (光村ライブラリー第 15 巻).
- 今江祥智. 田島征三絵. “どろんこ祭り”. ガラスの小びんほか. 樺島忠夫, 宮地豊, 渡辺実監修. 光村図書出版, 2002, pp.45-65, (光村ライブラリー第 15 巻).
- 上野千鶴子. “セクシュアリティ”. 女性学事典. 岩波書店, p. 293.
- 牛山恵. ジェンダーと言葉の教育: 男の子・女の子の枠組みを超えて. 国土社, 2014, 223p.
- 江原由美子. “「差別の論理」とその批判: 「差異」は「差別」の根拠ではない”. 増補 女性解放という思想. 筑摩書房. 2021, pp.113-155, (ちくま学芸文庫).
- 鈴木茂一. 男女の違いは認め合いたい(声). 朝日新聞, 1992-04-18, 朝刊, 声, p15. 聞蔵Ⅱビジュアル, (参照 2022-03-18).
- 関礼子. 物語の中のセクシュアリティ: 男性像と女性像の相互性をめぐって. 日本文学, 41(11), 61-71.
- 「教科書の中の男女差別」 「女性の権利委」の弁護士たち点検 女性が主人公 27% 小学校「国語」 写真・挿絵も“性別役割”が多い, 中日新聞, 1991-12-19, 朝刊, 第 2 生活, p20. 中日新聞・東京新聞データベース, (参照 2022-02-26).
- 永田麻詠. 小学校国語教科書に見る隠れたカリキュラムの考察: ジェンダーおよびクィアの観点から. 国語教育思想研究, (4), 2012, 37-46.
- 日本弁護士連合会. “「教科書における男女平等」についての意見書(1989年2月)”. 日本女性差別事件資料集成: 日本弁護士連合会両性の平等に関する委員会資料 1, 第 3 巻. すいれん舎, 2008, pp.187-238.
- 教科書の中の「男女差別」, 毎日新聞, 1980-05-08, p12, 毎索, (参照 2022-02-26).